

長岡克行教授退任記念号発刊に寄せて

長岡克行教授は、2013年3月に本学をめめでたく定年退職されました。先生は1967年10月に本学にご着任になられて以来、45年余りの長い期間にわたり、教育、研究、学内運営に携わってこられました。来年度2014年に経営学部50周年を迎えますが、その大半の期間にわたり中心メンバーとしてその発展を担ってこられたばかりでなく、本学全体の充実・発展にご尽力くださったことに対して、心から感謝申し上げます。そのご功績に対して、本学は2013年5月に名誉教授の称号を贈らせていただきました。さらに、ここに先生のご退任を記念いたしまして、本記念号（東京経大会誌（経営学）第280号）を先生に捧げて、感謝の意を表したいと思えます。

長岡先生は1942年東京都世田谷区にお生まれになりました。1965年に神戸大学経営学部をご卒業後、同大学院経営学研究科修士課程に進まれました。1967年3月同課程を修了された後、4月から引き続き博士課程に進まれました。博士課程に入学後10月から、本学経営学部助手に就任されるとともに研究を続けられ、1968年から1969年までベルリン経済大学への留学を経て、1972年神戸大学大学院博士課程を単位取得により退学されました。そして1970年4月に本学経営学部の専任講師になられ、1975年4月に助教授に、そして1983年4月に教授に昇進されました。

先生は、神戸大学でドイツ経営学の大家であられる海道進先生に師事され、その後ドイツの経営経済学、意思決定論、そして組織論に関する理論的研究を深めてこられました。そのご研究を著わした著書や論文は、業績リストに記載されておりますように膨大な量に及んでいます。そしてその優れた学識により、一時、本学を退職されてヴィッテン/ヘルデッケ大学経済学部から一般経営経済学・経営学史講座担当の教授として招聘され、ご活躍されました。また、そのご関心は社会システム理論に及び、特に、この分野の研究者として名高いニクラス・ルーマンに関する優れた研究成果を多数発表されております。そしてルーマンの〈社会の理論〉全体の詳細な解説書である、大著『ルーマン／社会の理論の革命』を著わされ、優れたルーマン研究者の一人として広く認識されております。

教育面でも、ご着任以降、学部、大学院において経営学史、経営学総論、労務管理論などの授業ならびに演習（ゼミ）、論文指導などをご担当になられ、長岡ゼミを巢立って、現在社会の各界で活躍しているゼミOBは多数に及んでおります。

さらに、このようなご研究・教育活動に加え、学内運営に関しましても、1984年4月から2年間学生部長として学生の福利向上のためにご尽力され、さらに本学経営学研究科開設に際しては準備委員会のメンバーとして、そしてその後2002年4月から2年間大学院経営学

長岡克行教授退任記念号発刊に寄せて

研究科運営委員長として大学院の開設、運営、改革に大きな役割を果たされました。また、40 有余年の長きにわたり経営学関連の講義を担当し、今日の経営学部の伝統を築かれ、経営学部のみならず、本学の経営学教育、人材育成に多大な貢献をなさいました。

先生はまさに謹厳実直というにふさわしいお人柄で、教育者としてあるべき姿を体現しておられます。ご自身を厳しく律しておられ、今回のご退任に際しても他の教員のご負担になることは避けたいとのご信念の基に、大々的な退任記念講義の実施を希望されず、本記念号の出版においても、あえて学内外の関係の深い多数の先生方からの寄稿を望まれました。

また、ここ数年、会議でのご発言は控え目でおられましたが、大学教育のあるべき姿に関して優れた見識をお持ちで、重要な節目ごとに非常に的確なご発言をされ、大学の重要な進路選択の際に大変貴重な役割を果たしてこられました。

現在、大学はかつてない大きな変革に遭遇し、大学の本来果たすべき役割と、高校あるいは産業界からの現実的な要請という、理想と現実の狭間で苦闘しておりますが、大学存続のために後者に力点を置かざるを得ない状況にあります。しかしそのために理想から大きく外れることがないように、先生のお言葉をかみしめて残された者一同、今後の難局に当たらねばならないと強く感じております。

このように思い起こしますと、改めて先生のご貢献の大きさに驚くとともに、本学に注がれたご厚情の深さに心より感謝いたしております。今回、定年により本学を去られることとなり、大変寂しい思いとともに、残された者として大変大きな責任を感じております。この困難な時期にあたりまして、今後とも後進へのご指導を賜りたくお願いするとともに、先生の一層のご健勝とご活躍を祈念して、先生のご紹介とさせていただきます。

2013 年 9 月

経営学部長 武 脇 誠